



日常の光

写し出された広島

2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日| 月曜休館 ※8月10日(月)は開館

開館時間/9:00~17:00(金曜日は20:00まで開館) ※入場は開館の30分前まで
所蔵作品展入場料(一般|510(410)円 大学生|310(250)円 高校生以下|無料)にてご覧いただけます。
繪景園共通券/一般|610円 大学生|350円
○()内は前売り20名以上の団体料金 ○障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料。

同時開催

2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日|
3階 所蔵作品展 前衛陶芸集団「走泥社」の時代

左上/藤岡 聖典 『月はゆく』より 平成26(2014)年 右上/高 幸一 『嵐次』 昭和29(1954)年
左中/高田 寿雄 『平和のこども』 昭和34(1959)年 写真提供:高田トシキ 右中/松重 英人 『御宇繪面』 8月6日午前11時頃 昭和20(1945)年
右下/明田 弘司 『夏の平和大賞 橋干に遊ぶ水泳の少年たち』 昭和26(1950)年 右下/後岡 孝子 『PARK CITY』より 平成30(2018)年

 広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上機町2-22
Tel: 082-221-6246 Fax: 082-223-1444
URL: <http://www.hpam.jp/>



笹岡 啓子 「PARK CITY」より 平成29(2017)年



高田 静雄 《仲良し》 昭和13(1938)年頃 写真提供:高田トシアキ

原爆投下から75年 広島の写真家たちが捉えた光

昭和20(1945)年、広島は原爆投下により焼け野原となりました。その未曾有の状態を指して「75年間(70年間)は草木も生えぬ」と語られましたが、生活の再建や街の復興に努めた多くの人たちの尽力により、今日の姿に至りました。

広島という街は、これまで国内外の写真家によって、様々な視点から撮影されてきました。そこには、原爆被害に迫る写真だけでなく、広島に住まう人々の何気ない、しかし、かけがえない日常を捉えた写真も多く見られます。

本展は、広島県出身の6人の写真家が撮影した広島に焦点を当てるものです。松重美人(1913-2005)は被爆直後の罹災者を撮影することに躊躇しながらもカメラを向けました。明田弘司(1922-2015)は、戦後、温かな眼差しで広島の復興を記録に留めました。オリンピック選手であった高田静雄(1909-1963)は、原爆症を患ってからは、平和な日常を写すことに情熱を傾けました。追幸一(1918-2010)は、郷土の風景や人々の営みを造形的な観点で捉え、国際的評価を受けました。藤岡亜弥(1972-)や笹岡啓子(1978-)は、体験し得ない、しかし潜在する原爆の記憶を、今日的な視点から表現しようとしています。展覧会では、戦後から現代へと移り変わる広島において、いかに写真家たちが日常の情景を各々の手法で留めようとしたかを辿ります。

75 Years after the Bombing: The Light captured by Hiroshima Photographers

In 1945, Hiroshima was completely destroyed by the atomic bombing. Referring to the unprecedented condition of the city, it was believed that not even a single blade of grass would grow in Hiroshima for 75 years. However, the effort of many people to rebuild the city and the lives there has made Hiroshima today.

The city of Hiroshima has been captured by photographers in Japan and abroad from a variety of perspectives. They include not only photographs of the damage caused by the atomic bombing, but also photographs of the casual but irreplaceable lives of the people of Hiroshima.

This exhibition focuses on Hiroshima as captured by six photographers from Hiroshima Prefecture. Matsushige Yoshito (1913-2005) decided to take pictures while hesitating about photographing the victims of the atomic bombing in the immediate. Akeda Koshi (1922-2015) documented the post-war reconstruction of Hiroshima with a gentle gaze. Takata Shizuo (1909-1963), an Olympic athlete, after suffering from A-bomb disease, became passionate about capturing the peaceful daily life. Sako Koichi (1918-2010) received international acclaim for his work capturing the landscape and life of people in his hometown from a figurative perspective. Fujioka Aya (1972-) and Sasaoka Keiko (1978-) expressed the memory of the atomic bombing from a contemporary perspective, which was never experienced but is latent. This exhibition traces the ways in which photographers in Hiroshima have tried to capture everyday scenes in their own ways as the city transitions from post-war to the present day.



藤岡 夏弥 「川はゆく」より 平成27(2015)年

迫 幸一 《子供の世界》 昭和28(1953)年



松重 美人 《御幸齋西詰 8月6日午前11時頃(2枚目)》
昭和20(1945)年 中国新聞社所蔵

明田 弘司 《鐵町小学校で野遊する子どもたち 発着中の世界平和記念堂》
昭和28(1953)年



同時開催

2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日|

3階 所蔵作品展

前衛陶芸集団「走泥社」の時代

Collection Exhibition: Age of Avant-Garde Ceramic
Artist Group "Sodeisha"

1948年に京都の若手陶芸家によって結成された前衛陶芸集団「走泥社」。新時代の陶芸を志向した作家達の作品を紹介します。



八木一夫 《盲亀》 昭和39(1964)年

御来館の皆さまへ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、以下の対策を行っています。ご理解とご協力をお願いします。

次に該当するお客様は、入館をご遠慮ください。
発熱や、軽度であっても咳、のどの痛みなどの症状がある方

【ご協力をお願い】

- マスク着用 ○手指のアルコール消毒 ○咳エチケット
- 会話は控えめにし、特に大声での会話は行わないでください。
- 人と人との接触を避けるため、できるだけ2mの距離を空けてください。
- 来館者が多い場合は、入場制限を行う場合があります。

広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上機町2-22

Tel: 082-221-6246 Fax: 082-223-1444 URL: <http://www.hpam.jp/>

- ・JR広島駅より約1km 広島城より約400m
- ・市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白島線で「観音園前」下車約20m
- ・ひろしまめいびろ〜ぶ(広島駅新幹線口のりば発着、市内循環バス)「県立美術館前」下車約80m



2020(令和2)年7月23日|木・祝|—9月27日|日|

2階 夏の所蔵作品展

サマーミュージアム 戦後75年特集

Collection Exhibition: Summer at the Museum:
Special Collection: 75 Years After the War

美術と戦争、平和をテーマにした作品を特集します。



芥川永一 《教師と子どもの碑(石膏原型)》
昭和45(1970)年

彫刻展示スペース 造形で奏でる作家 —芥川永一—

平和公園に設置する「教師と子どもの碑」の制作をきっかけに、ヒロシマというテーマと深く取り組んだ彫刻家、芥川永一。広島で活動を始めたころから晩年まで、さまざまな作風の作品を幅広く展示します。



パウル・クレー 《内なる光に照らされた
個人》1921年

1室 退廃芸術展 —危機の時代の画家たち

ナチス・ドイツの時代、純血主義の理念にそぐわない作品は「退廃芸術」として貶められました。ナチスによって活動が禁じられた芸術家の作品を、当時の資料を交えてご紹介します。



黒川 龍光 《男子をかわらぬ自画像》
昭和18(1943)年

2室 戦争と作家

戦前の自由な雰囲気を感じた作家、戦時中の重く暗い雰囲気を耐えた作家、原爆の投下を目の当たりにした作家、物心ついでに戦争を考えるようになった作家など、さまざまな作家の作品を幅広く紹介します。

3室

小特集:平山郁夫 —救済への道

原爆の後遺症に苛まれながら、自らの絵の道を模索した広島出身の日本画家・平山郁夫。原爆から生き残った者の責務として描く、信念と祈りが込められた静謐な作品を紹介します。



山田比呂實 《陶製鉢(龍人鉢)》
昭和30年代後半

4室 民藝運動の作家たち

柳宗悦と共に民藝運動を起こした陶芸家・河井寛次郎、浜田庄司、宮本憲吉をはじめ、民藝のもつ美を自己の制作に取り込み、独自の作風を築いていった作家たちの作品を紹介します。

展覧会紹介

1945(昭和20)年、広島は原爆投下により焼け野原となりました。その未曾有の状態を指して「75年間(70年間)は草木も生えぬ」と語られましたが、生活の再建や街の復興に努めた多くの人たちの尽力により、今日の姿に至りました。

広島という街は、これまで国内外の写真家によって、様々な視点から撮影されてきました。そこには、原爆被害に迫る写真だけではなく、広島に住まう人々の何気ない、しかし、かけがえのない日常を捉えた写真も多く見られます。

本展は、広島県出身の6人の写真家が撮影した広島に焦点を当てるものです。松重美人(1913-2005)は被爆直後の罹災者を撮影することに躊躇しながらもカメラを向けました。明田弘司(1922-2015)は、戦後、温かな眼差しで広島の復興を記録に留めました。オリンピック選手であった高田静雄(1909-1963)は、原爆症を患ってからは、平和な日常を写すことに情熱を傾けました。迫幸一(1918-2010)は、郷土の風景や人々の営みを造形的な観点で捉え、国際的評価を受けました。藤岡亜弥(1972-)や笹岡啓子(1978-)は、体験し得ない、しかし潜在する原爆の記憶を、今日的な視点から表現しようとしています。本展では、戦後から現代へと移り変わる広島において、いかに6人写真家たちが日常の情景を写真という手法で留めようとしたかを辿ります。

作家紹介

まつしげ よしと

松重 美人 (1913-2005)



《御幸橋西詰 8月6日午前11時頃》
昭和20(1945)年 中国新聞社所蔵

1945(昭和20)年8月6日午前8時15分、原爆投下によって、広島は未曾有の被害をこうむりました。立ち昇るきこ雲を捉えた写真は複数残されていますが、この日の被災者の姿は、松重が撮影した5枚の写真しかありません。

御幸橋西詰にて撮られた写真には20人余りが撮影されていますが、ひとりひとりの顔ははっきりと写ってはいません。多くの人たちは全身に火傷を負って苦しんでおり、「あまりにもむごくてもう撮れなかった」と松重は述べています。新聞記者という立場ではありましたが、突如奪われた日常を撮影することは容易ではありませんでした。

あけだ こうし

明田 弘司 (1922-2015)

明田は、戦後60年余りにわたり、広島が荒廃から復興し、今日に至るまでの様相を撮影し続けました。混迷した時代であったにも関わらず、写真に悲壮感は殆ど見られません。そこには、遅く生きる人々を被写体とし、希望を託そうとした様子が垣間見えます。

報道写真の先駆者である名取洋之助が広島を訪れた際には、「広島市は原爆ですべて焼き尽くされた。元に戻るのにこれから何年かかるか分からないが、皆さんはそれを記録しなさい」と教示を受けます。このことが転機となり、当時29歳であった明田は、広島を写真に残し続けました。

作家紹介

たか た しず お
高田 静雄 (1909—1963)



《仲良し》昭和13(1938)年
写真提供: 高田トシアキ

高田は1936(昭和11)年、砲丸投げの日本代表としてベルリン・オリンピックに出場しました。「砲丸王」と呼ばれ、1934(昭和9)年に樹立した日本記録は29年間破られませんでした。

1945(昭和20)年、中国配電(現・中国電力)での勤務中に被爆し、生涯、原爆症に苛まれました。身体が思うように動けなくなったため、長男の助けを借りながら二人三脚で撮影地に向いたといいます。アスリートの喜びや悲しみを自分ならば鮮明に写し出せると考え、近隣の学校の運動部などを訪問し、写真を残しました。また、自身が住んでいた己斐の街の風景も数多く撮影しており、そこには何気ない日常に平和を見出した高田の考え方が垣間見えます。

さこ こう いち
迫 幸一 (1918—2010)



《息吹》昭和29(1954)年

迫の若い頃の夢は、詩人になることでした。しかし、文学的才能の限界を自覚し、小学校5年生から慣れ親しんでいたカメラの世界へ入り込んだといいます。彼の作品に見られる、抒情性豊かな人物や風景、幾何学性を活かした抽象的な表現には、こうした思想背景が感じられます。

原爆被災後の混乱期は、職場を転々とする中、焦燥感から脱出することを求め、悪天候の日も写真撮影に没頭したといいます。原爆ドームを撮影した写真も多く見られますが、撮影の根底には「全世界の人々に戦争の恐ろしさ、むなしさを伝え、心から平和への気持ちを新たにさせてくれる」という思いがありました。

ささ おか けい こ
笹岡 啓子 (1978—)



『PARK CITY』より 平成30(2018)年

広島市内に生まれた笹岡は、上京してこの地を一度離れたときに、平和記念公園の「ぼっかりがらんとした」空間に違和感を覚えるようになったといいます。

2001(平成13)年から継続的に制作・発表されている『PARK CITY』は、爆心地であった平和記念公園とその周辺を撮影したシリーズです。原爆投下前の中島地区は、現在と異なり、商店や民家に加え、旅館や映画館などがひしめく繁華街でした。作者は、こうした薄れていく被爆の記憶を現在に見出だそうとする一方で、知識や想像によって安易に過去を理解したつもりになることへ警鐘を鳴らします。

press release

作家紹介

ふじ おか あ や
藤岡 亜弥 (1972—)



『川はゆく』より 平成26(2014)年

2013(平成25)年、藤岡はニューヨークでの4年半の滞在を終え、広島市内の川沿いにアパートを借りて生活を始めます。この川の街を歩き回る中で、これまで撮影されていなかった新たな広島像を見出し、『川はゆく』というシリーズにつながりました。

作家は、過去と同居しながらも日常を生きる人たちの姿を照らし出そうとしました。川は上流から下流へと流れます。しかし、潮の満ち引きによって流れはときに逆になると、暮らしの中で気付いたといいます。時間は、常に未来へと流れ続けますが、ときに埋もれた下層の記憶が逆流によって巻き上がるかのように、その写真は、過去の広島を現在の眼に浮かび上がらせます。

【媒体掲載用の画像提供について】

- ※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。
- ※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。
- ※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。
- ※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館
〒730-0014 広島市中区上幟町2-22
TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444
E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 山下 寿水
総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる